

ユナイテッドピープル

「クリックから世界を変える」33歳 社会起業家の挑戦

プロローグ

いったい、何のために働いているんだろう。

七年前、仕事中に倒れた僕は点滴が刺さった腕を見つめながら考えていました。

当時、IT業界で働いていた僕にとって、仕事は忙しくとも充実していて、また、自分が成長できる内容でした。

でも、心から楽しいと言えるだろうか？

今日、死んでいたら幸せだったと言えるだろうか？

僕の答えは「NO」でした。

「このまま死んだら最低の人生だっただろうな」と思ったのです。

その日、僕は、会社を辞めることを決めました。

会社を辞めて、何をしようかなんて考えていませんでした。

ただ、お金とか、いつか起業するための経験とか、そんなことのためだけに働くのはもうやめよう、自分自身が心から満足できる仕事をしようと思いました。

いつ人生が終わったとしても、「いい人生だったな」「後悔はないよ」と言える仕事。そんな仕事をしたいと思ひ、次の道を探したのでした。

二〇〇三年五月、僕は、「クリックから世界を変える」というキーワードで、誰でもネットで手軽に社会貢献ができるウェブサイトを開設しました。

サイトの名前は「イーココロ」。

紛争、人権、貧困、地雷除去、難民支援、そして環境問題など、世界には様々な問題が存在します。そのような問題を解決しようと、政府の手が届かない現場で奮闘しているのが、世界各地のNGO（非政府組織）やNPO（非営利団体）です。

イーココロでは、世界各地のNGOやNPOに、「無料」で募金ができます。

募金の方法はいたって簡単。

サイトで買い物を楽しむだけで募金ができる「ショッピング募金」。

旅行の手続きや保険の見直しなどの行動が募金になる「アクション募金」。

そして、クリックするだけで募金ができる「クリック募金」。

いずれも、ユーザーは募金に際して、一円も負担しなくてもよい仕組みになっています。

イーココロ!では、協賛企業から支払われる広告費によって運営されています。

たとえば「ショッピング募金」では、「楽天」や「Yahoo!ショッピング」といったネットショップで、ユーザーがイーココロ!のサイトを通じて買い物をした場合、金額の数パーセントが広告費として企業から支払われます。その半分をサイトのユーザーが募金できるポイントとして活用して、半分を運営費としてイーココロ!の収益としています。

現在、僕はこのイーココロ!のサイト運営をメインに、世界の問題解決のためにインターネットのノウハウを使って事業を展開する会社を経営しています。

会社の名前は、ユナイテッドピープル株式会社。

この社名には、世界中の人と人をつないでいき、力を合わせてよりよい世界を創っていきたいという想いを込めました。国益という狭い枠組みを超え、「地球益」という視点に立つことができれば、人間はもっと大きな力を発揮できるし、世界はもっとよくなる。こんな考えのもと起業して七年が経った現在は、NGO支援のための映画の配給事業など、活動も多岐に渡ってきました。

起業してからこれまで、順風満帆にきたかといえば、これはもうまったくでした。

それは、イーココロ！の初年度の寄付金が二万円だったことでもわかります。

一日でも、一月でもない。たった二万円が「初年度」の総額でした。

年に二〇〇万円以上が寄付金として集まる現在の状況からすれば、実に半日分にも満たない額です。

イーココロ！では、企業からの広告料を半分は寄付に半分は収益にしています。

つまり、寄付金と収益はつねに同じ額。この二万円という数字は、そのまま売上と同じということになります。

これではまるで売れないバンドマンです。デビューはしたものの本業では食べていけない。実際はネットのコンサルティングの仕事でなんとか日銭を稼ぐ生活でした。しかも、こんな状態は初年度だけではなく、三年も四年も続きました。

株式会社が事業として世界の問題解決を目的にするということも、当初はなかなか理解してもらえず苦労しました。経営の大先輩からは、「社会貢献なんてのは儲けてからやることだ。お前にはまだ早いよ」と言われ、サイトへの加盟をお願いに行ったNGOの代表からは「ほんとうにやる気があるんですか」と言われ……。

それでも、この道で行こうと決めた気持ちに不思議と迷いはありませんでした。むしろ心の奥ではいつも、自分がこれだと思える仕事が毎日できて、こんなに幸せなことはないと思っていました。

この本は、十年前にパレスチナのガザ地区で僕が出会った、少年と彼の「夢」の話から始まります。

それから十年。僕は多くの人との出会いを重ねることで、僕自身の夢を見つけることができました。そして多くの人と一緒に夢を育てることができました。

その中で気づいたことは、人間は変わることができるということ。

そして、僕ら一人ひとりの行動が変われば、世界を変えることだってできるといえることです。

なんだかえらそうなことを言っていますが、僕自身、長い間迷い続け、目の前の憧れや人気に振り回されてきました。会社を三度も転々として、悶々と悩んであがきながら、やっと自分の夢に気づいたような人間です。

でも、そんな僕だからこそ、伝えられることがあると信じています。

僕の人生が変わったように、人とつながり、勇気を出すことで、憧れでもあきらめでもない、本当にやりたいことに出会えるということ。

第①章

パレスチナで見た
世界の現実

ワイン好きの大学生／行くはずのなかった場所

プロローグ

少年の夢

25

15

2



第②章

マネーORライフ？

.....

藤永香織さんとの出会い

「俺が入ったら、即、殺されるよ」

ようこそ、ガザ地区に／ここに希望の空港があった

どこから来たの？／香織さんの想い

拉致!?／重たすぎる現実

趣味を仕事にするのが夢だった

魚を三枚におろす日々／「ビットバレー」に心惹かれて

あの夢に再び出合う／何のために働くのか

ここで死んだら幸せだろうか／「独立」

クリツクから 世界を変える

.....

「いつか」はなかなか来ない／再起動

「時」が重なる／僕の命を使う場所

「イーココロ！」誕生／NGOを探して

「本当にやる気あるんですか？」

寄付金はたったの二万円

暗礁に乗り上げる／イラクへの旅

旅の情報ノート／ヨルダンで兵士

だって日本は民主主義国家じゃないか



第④章

ユナイテッド・ピープル

.....

たった二人のデモ行進

地道にゆつくりと育てよう

ユーザーからのメッセージ／クリック募金

足を曲げて踏ん張ろう

自分を高める「師匠」との出会い／砂漠に水をまく

社員第一号／世界の「潮目」が変わった

イーココロ！の支援で世界が変わる

「ユナイテッド・ピープル」に社名変更

人が集まる流れができた／成長の足音が聞こえてきた

一人ひとりをつないで、世界の問題を解決する

署名TV／改善を続けること

「地球益」をめざして

「感じる」メディアをつくりたい

日本からの寄付はいりません／渡辺大樹という男

新事業「映画配給」スタート

できないことなんてないんだ

パレスチナ再訪から見えてきたもの

紛争の中に平和の芽がある

世界に広がる「イーココロ！旅の大学」／挑戦は続く

エピローグ

少年の夢

UNITED
PEOPLE

一九九九年一月、二二歳の僕はパレスチナのガザ地区にいた。

現地で知り合った、医療ボランティアの日本人女性が働く病院だ。

彼女にガザ地区を案内してもらうことになっていたのだが、まだ何時間かは病院で働くという。どうやって時間をつぶそうかと、ぶらぶら歩いていた。

ふと窓の外に目を向けると、病院前の広場でサッカーに興じる子どもたちがいる。楽しそうだったので、僕もまぜてもらおうことにした。

しかしここは日本ではない。パレスチナのガザ地区だ。なんて言ってまぜてもらえばいいのかな……などと思いながら近づいていくと、向こうから先に声をかけてきた。「どこから来たのー？ 中国？ 日本か！ 僕、日本製の時計もってるよ、ほら。写真とってよ」

パレスチナの子どもたちは人なつっこい。日本人どころかアジア人をほとんど見たことがないのだろう、まるで動物園のパンダになった気分だ。珍しがられているうちに、すっかり仲良くなってしまった。

小学生ぐらいの小さな子から、高校生ぐらいの大きな若者もいた。石ころやらブロックのかげらやらが落ちている小さな広場で、みんなでワイワイ言いながら、汗まみれ

埃まみれでサッカーボールを追いかける。

パレスチナ、ガザ地区。

それまでニュース映像でしか見たことがない、世界の問題の縮図のようなところ。

日本から来た僕にとって「危険」「自爆テロ」「紛争地帯」という物騒なイメージしかなかった。でもこうして一緒に遊べば、日本人とまったく変わりない、ふつうの子どもたちなんだ。同じ人間だしな……。

そのときまで、のんきにそう思っていた。

サッカーが終わって、みんなでおしゃべりをしていた。英語が通じる子が何人かいだったので、僕はなんの気なしに聞いてみたのだった。

「What is your dream?」——君の夢はなに？

一人、英語がめちゃくちゃ上手な、中学生ぐらいの男の子がいた。

その少年は僕の問いに、さらっと答えた。

「僕の夢は爆弾の開発者になって、できるだけ多くの敵を殺してやることなんだ」

えっ。

爆弾の開発者？ 敵を殺す？

ちょっと待てよ。お前なに言ってるんだよ！

僕はびっくりして、どう受け止めていいかわからなかった。

でも、何かをこの子に言わなきゃいけない。そう思いながら、とにかく二人で話すことにした。

他の子たちとは別れて、病院のレストランに連れていく。西日がさしている窓側のテーブルに座り、トルコ式コーヒーを二つ注文した。

「さっきの夢のことだけど、なんで君、そんな風に思うようになったの？」
すこしだけ間をおいて、少年は僕の目を見ながら答えた。

「僕が四歳のときに、突然やって来たイスラエル軍の兵士に、おばさんが撃ち殺されたんだ。おばさんは武器をもっていたわけでもないのに、いきなり撃たれたんだ」

やけに毅然とした口調だった。

僕は、言うべき言葉が見つからなかった。

「なんでおばさんは殺されなきゃならなかったの？ 小さいころからずっと、なんで、なんで、と思いつづけてきた……。時々、友だちや家族とイスラエル軍の兵士に向かって石を投げたりした。あるとき、兄が捕まって、半年間刑務所に入れられてしまった。別の友だちは、石を投げていたところを兵士に撃たれて死んでしまった。なんで、彼も死ななければならなかったんだろう」

少年の語る内容に、僕は完全に言葉を失っていた。

「あるとき、いつものようにモスク（イスラム教の礼拝堂）に行った。すると、そこにいた大人たちが楽しげに話しかけてくれて、何回か行くうちに友だちになったんだ。おばさんの話も聞いてくれた。あるとき彼らに言われた。『俺たちは武装闘争グループなんだ。君も一緒に戦おう』と。僕は、うれしかったよ。僕と同じように、なぜパレスチナ人は苦しまなければいけないのかと考えて、戦おうとしている人がいることを知ったから。僕は今、そのグループで教育を受けているところさ」

僕が沈黙する間も、少年は話し続けた。

「将来は爆弾を製造する技術者になって、イスラエル兵を皆殺しにしたい」

……。

「それが僕の夢なんだ」

……。

「僕が地獄に墮^おちることによってパレスチナ人に幸福が訪れるなら、僕は自分の命を喜んで差し出すつもりだ」

……。

「見ててよ、いつか僕はニュースに出るから。そう、ヒットラーのようにね」

……。

彼が発する言葉の意味を、僕は理解できずにいた。

さつきまで一緒にサッカーをしていたこのあどけない少年に、今は恐怖を感じてい

た。口の中はカラカラに乾いていて、それでもなにか言わなければと、必死に反論した。

「なに言ってるんだよ！ 君のおばさんが殺されて、今度は君が爆弾を作って誰かを殺す。そしたら、その殺された人の家族が今度は君や君の家族を殺したいと思うよね。きりがないじゃないか。そんなやり方じゃ、平和は来ないよ。君はおばさんのためにも平和を求めなければいけないんだ。攻撃するんじゃないよ。イスラエルとパレスチナがどうすれば共存できるかを考えなきゃダメだよ」

僕は必死に言葉を絞り出した。

どうすることもできないのか。彼の行動を止めることはできないのか。

目の前の少年が体験してきた、悲惨な現実。幼いころから、あまりにも身近にあった「死」。そして戦争。

そんなの……。とてもじゃないけど、説得なんかできないよ。

心の中ではわかっていた。

それでも、僕には語りかけることしかできなかった。

少年は僕の目をみつめながら、真剣に話を聞いてくれていた。

「ケンジ、君が言ってくれたことは忘れないよ。ケンジの言うことは正しいと思う」

少年の目に力がこもる。

「でも、僕はおばさんのことが忘れられない。僕は今の夢をあきらめられないんだ。話してくれてありがとう」

寂しげな笑みを浮かべつつ、少年はきっぱりと言った。

そして、僕は手を振って別れた。

そこには、何もできなかった自分がいた。

敵を皆殺しにしたいと夢を抱く少年。子どもが子どもらしい夢を描くことが許されない世界。そんな現実が目の前にあった。

少年と別れてから、十年が過ぎた。

あの日、彼が語った夢の話は、僕の心に別の大きな夢の種を植えていった。

ただ、僕が僕の夢に気づくには、それから数年の時間が必要だった。